研究ノート

正月行事（宇佐郡駅川町拝田・山本地区）

小玉洋美

一、正月の支度

1、キキリヅイタチ　旧暦の十二月一日をキキリヅイタチという。現在は特別な行事はないが、家によつてはアズキメシ（赤飯）を炊いたり、餅を一臼ついたりして祝う。また主人は神棚に御神酒を上げて家のなかで酒を飲む。キキリヅイタチがくると氷がはつていよいよ寒くなるという。また昔はこの日、正月にたく薪を切つていたともいわれている。

2、ススハライ（煤払い）　昔はいろりの燃料として、割木などの金目になる薪はみな売つてしまい、そのかわりトキワやシイダを焚いたため、一年たつと家の中がたいへん煤けた。それで必ずオナゴ竹の笹で家中の煤払いをした。煤払いはたいてい餅つきをする前日までに済ませる。家によつてする日が違うが、二十二日から二十四日までが多い。この時に神棚や床の間に供えてある前年のお札（皇大神宮・宇佐八幡宮のお札）を取りかえる。新しいお札は十二月の煤払いよりも前に、区長が宇佐神宮庁より受け取り、神社総代が各戸に配付しておく。古いお札は宇佐八幡のオシンギョウ（お心経会。旧正月十三日に八坂神社の社前で行なわれる。当日はドンド焼きがある）に持つていつて焼く家が多かつた。宇佐に持つていかぬ家では粗末にしないように屋根裏に保存しておく。また家によつては煤払いの日に庭で焼き捨てる。お札の取りかえは主人がするのが普通であつた。

3、セツツキ（節季つき）　キキリヅイタチがすぎてセツキ（節季）になると、たいていの家でセツツキが行なわれる。これ

は正月早々に物をつくのは世間体が悪いというので、正月用の米や麦を夜なべ仕事に大量につきためておくことをいう。どの家でも一晩に五、六斗ついたもので、餅つきの前日までにはすませておくが、特にきまった日はなかった。セツツキとは節季つきのことで、ものすりはたいてい夜なべ仕事であった。

4、餅つき　現在は新正月だけをするが旧正月をしていた頃は、小寒に入った二十五日から三十日にかけて餅をつく家が多かった。どの家でも苦餅はつかぬといって二十九日をさける。これは二十九日に餅をつくと、火事がおこるといわれているからである。

現在では機械で餅つきをする家が多くなったが、戦前は親類同志や近所隣りが共同してつくのが普通であった。当日はセーロー(蒸籠)を三重ねにして二釜で餅米をむして準備をし、朝から大人が三、四人でついてなかなかにぎやかであった。たいていの場合、一戸あたり四～八斗、平均五斗はついたが、現在は一斗つく家はまれである。そのかわり寒餅を新暦の二月頃(旧暦の大寒)につく家が多くなった。

餅の種類はオカガミ(お鏡)とコモチ(小餅)、それに切り餅がある。切り餅にはカキ餅やアラレなどがあり、ごま・青海苔・大豆・落花生などを混ぜて食紅などで色をつけ、一臼のままでモロブタに入れておき、かわいてから切ってカキ餅とアラレを作る。カキ餅は厚さ四～五ミリの長方型の餅で、アラレはカキ餅をさらに細かく切り分けたものである。その他の餅としては、つきたての餅を小さくちぎって酢につけて食べる酢餅や、つきたてのやわらかい餅の外側にあんをまぶしつけたオヘギなどがある。これは主として当日に食べるものである。あん入りの餅は吹出物ができるといってつかない家も多いが、正月中にくる乞食にやるために少しはついておく。

5、ヤナギモチ(柳餅)　切り餅の一種にヤナギモチというのがある。これは食紅で染めた餅を細く引きのばし、竹箸を五本外側にはさんで紐で巻いておき、半乾きに乾いてから小さくアラレに切り、孟宗竹の枝にさしたものである。枝にさすアラレは梅の花形をしており、家によってはこれに四角なアラレをつけたり、短冊を下げたりしていた。柳餅は座敷の床の間とか、

玄関の鴨居にさしておき、新暦の三月頃まで飾つておく。なお山本地区では虚空蔵寺の甘茶祭までとつておくという。

6、松迎え　上拜田では氏神の冬祭が旧暦の十二月十日で、その日までにザヤク(座役)を渡すことになつている。しかしお宮の門松は十二月三十一日に前年のザヤクが立てることになつている。またこの日に正月の飾付けや供物も用意しておくが、注連縄は鳥居や合祀してある石祠の周囲に張る。鳥居にかける注連縄は片方が太くなつているゴボウジメで特別に大きなものを用意する。供物は御神酒・頭付き・ミズシオ・野菜・果物・菓子・鏡餅（二重ね）昆布・米一升、昔は必ず鴨の肉を供えるならわしがあつたという。

一般の家では正月の準備は前日にするというのが多いが、煤払いをしてから年の夜までの間に、山から三階の根松や竹を伐つてきて門松をたてる。また床の間や神棚に供える榊・ツルシバ・モロムク（裏白）やドンド焼きの時に鳴る木の葉（トベラ）も同時に切つてくる。これは主人の仕事で女は山にはいかない。

7、注連縄　正月に神棚や床の間に張る注連縄は家によつて一定しないが、打つた藁ではけがれるといい、スグリ藁を使う。なう人は七十才以上の老人がよいとされ、また女は神様から嫌われるので女にはなわせないのが普通である。

注連縄には白紙を切つた御幣を挟むが、縄の太さは全部同じで、ない口をくびらないのがきまりとされている。なう時は必ず左縄で、最初三回ねじつて根元を三分の一ぐらい出した藁をつぎたし、次に五回ねじつてまた三分の一ぐらい根元を出した藁をつぎたし、さらに七回ねじつて三分の一の根元を出しておく。長くする時はこれを繰り返していくが、最後はしめくくらない。御幣は三本ずつ出ている藁の根元と根元の中間に挟んでおく。拜田は全戸が真宗であるが、神棚や床の間・荒神様・水神様には注連を張るのが普通である。

8、門松　家によつて門松の立て方が異つていたという。昔は特別の家でなければ門松を立てず、普通の家では「正月の入り口」である玄関の柱に三階の根松を結びつけ、これに昆布をくくりつけるだけであつた。特別の家では、門口と玄関の両側や倉の入り口・井戸などにオメン(男女)の三階の根松（高さ一メートルくらい）を立て、これに十七センチくらいの竹三本を

添えて藁で根元を結び、その中ほどのところに橙・昆布・するめをキビリ（結び）つけた。戦前までは正月の松はどこの山のを切つてもよいといわれていたが、実際には自分の山から切つてくるのが普通であつた。

氏神様の門松は高さ三メートルくらいの五階の根松を使い、これを拝殿の両側に立て、根元を倒れないように松の割木でさえ、その上部に枝のついたオトコ竹をさし渡す。これを高ジメという。竹の中央部に橙・昆布をキビリつけておく。数年前より新生活運動が普及し、門松が一切廃止されたため、現在では役場から配付される門松を印刷した紙を玄関の両側の柱に貼るだけとなつたが、氏神様には昔通りの門松を立て続けている。

9、トシカザリ（年飾り）　拝田地区や山本地区ははとんどの家が真宗なので神棚はないが、座敷の床の間にタイマ様（伊勢神宮）や宇佐八幡宮のお札を貼つてある家が多い。昔は鬼門に棚を作つてお札を貼る家が多かつたという。

年の夜にはお札を貼つてある床の間や神棚に注連を飾り、オトコ松とオナゴ松を供え、家によつては榊も新しいのと取りかえ、白紙をしいた上にオカガミをのせ、その間にモロムクと昆布を挾み、オカガミの上に橙をのせておく。家によつてはツルシバやするめも一緒に挾んでおくという。

また山本地区では、床の間に三宝を用意してその上にお水と穀類をのせておく。水は元日の朝カワシオ（川の面に塩をまき、そこから汲んだ水）を汲んできて供えるという。カワシオは正月に限らず、毎月の一日と十五日に汲む家も多いという。拝田・山本ともに仏様にはお飾りを三ところ供える。中央に大きな鏡餅のお重ね、左右に小さなお重ねをおく。餅だけで注連飾りはしない。このほか、年飾りをするのは台所のカマド・井戸の水神様・ナイショの大黒様・屋敷内の荒神様・倉の入り口などがある。さらに俵・鞍・馬車・農機具・その他副業に使う道具類などの主だつたものにはオカガミを供え、モロムクと昆布を挾み、橙をのせる。年飾りはたいていの場合は主人がする。現在では新生活運動によつて簡略化されてしまつたが、テレビやオートバイなど高価なものにオカガミを供える家があるという。

10、ウンソバ（運蕎麦）　上拝田では二十九日の夜は必ず蕎麦を食べた。これをウンソバと呼ぶ。安倍一統では分家の人々が

本家に集まつて食べるならわしがあつたというが、現在では家単位になつたという。言伝えによると、二十九日に蕎麦を食べずに餅をついた家があつた。ところがその家は運が悪く、とうとう焼けてしまつたという。

11、歳暮　嫁を貰つた年の暮には、嫁の実家に四升餅か五升餅に添えて三貫目以上の鰤を持つて行く。二十五日に夫婦揃つて行くことが多いが、この時嫁の兄弟姉妹などにもおみやげとして足袋や下駄などを贈る。初正月という。先方は年玉と受取つた鰤の鰭元三分の一を必ず返すことになつている。

嫁の家ではオカガミと鰤を床の間に飾つておき、正月の三〜六日頃の間に（上拝田では四日のオニワの日にきまつていた）婚家の両親・兄弟などを招いてオセツをする。その時に贈られたオカガミを必ず使つて雑煮を作り、鰤で刺身と吸物を作つて出すことになつている。オセツが終つて帰る時には、使つた鏡餅を切り取つて婚家に贈るならわしがあた。これをオカガミビラキとよんでいる。堅い所では、貰い方（婿方）がその翌日か翌々日頃、親類や嫁の実家の両親を招いてオセツをし、床の間に飾つてあつた鰤元三分の一の鰤を使つて御馳走を作つて出す。

二年目以後になると、遣り方・貰い方ともに年内か明けて正月三日以内には、オカガミを年玉として先方に贈り届ける。特に貰い方（婿方）は利上げといつて、嫁の実家の両親が生きている間は鏡餅を贈ることになつている。しかし子供が生まれ年を経てくると餅がだんだん小さくなつたり、廃止されたりするのが普通である。

隣近所に対しても、年内に世話になつた家にはオセイボといつて下駄などの品物を贈るならわしがあつた。貰つた家ではこれを正月の間じゆう床の間に飾り、年始の客に披露したという。

12、大晦日　この日はトシノヨとかオオドシといい、正月の松飾りをする家が多かつた。氏神様のザマエ（座前）になつていた家では、午前中に主人がお宮の飾りつけにでかけることになつていた。

この日の夕方、上拝田ではゴゼンマイリをする一統が多かつた。先祖を同じくする親類一統の主人がヨローチ（寄合つて）先祖の墓に参つた後、お互いの仏壇にお参りし合うことをいう。年内に一統の家に新仏が出た場合には、その墓にも参つてそ

の家にお悔みをいうことになつている。

新仏を出した家への悔みは近所からも来るが、悔みを受けた家ではお茶と称して酒を一杯出すならわしであつた。トシグヤミという。トシグヤミは現在でも一般に行なわれている。

年の夜にはトシメシといつて御馳走を作り、家族内だけで食べることになつている。下拝田では年の夜に焼豆腐を食べると泥棒が入らないといわれ、年飯の菜には必ず焼豆腐を加えて食べる。家族の多い家では豆腐を家族の人数だけ串刺しにして焼き、必ず全員が一切れずつ食べるようにしたといわれる。

年の夜には夜遊びが公認されており、どの家でも「今夜はオオトシじやき」というわけで、子供を夜遊びに出していた。子供達の集まる場所は日頃から子供が遊びによる家で、主人がやかましくない家に限られ、カルタや双六・トランプなどをして夜ふかしをするのが常であつた。ワケーモン(若者)や娘達も友達の家に遊びに行つて、「大年じやき一番雞のうたうまで話そうや」と語り明かすならわしがあつた。年によつては、年飯を食べてから友人と連立つて宇佐八幡の大祓に参り、廊下で夜を明かして初参りを済ませてから帰つて来ることもあつた。宇佐八幡には郡内の老若男女が集まり、回廊で年籠りをする者が多かつたという。年の夜にはオトナ(結婚した成人)は比較的早く寝たようである。特に主人は元日の朝、誰よりも早く起きて若水汲みをし、氏神様にお参りするところもあるという。

二、大正月の行事

正月に迎える神はタイマ様(皇大神宮)と宇佐八幡である。煤払いの時に取りかえた新しいお札に注連飾りをし、オメン男女)の松と供物を供える。その他、家内の大黒様・荒神様・水神様にもお供えをするので、正月の神様は玄関からやつてくるいろいろな神様全部であるという。歳徳神については聞いたことはあるが、正月の神様として迎えたことはないという。

1、元日　朝の行事は家によつてまちまちであつたという。拝田では主人が一番さきに起きて塩と昆布を井戸に供え、拍手

を打つてお参りをしてから水を汲む。ワカミズという。主人は必ずワカミズをわかした茶を飲む習慣があつたというが、最近ではあまり行なわれない。山本地区では主人が誰よりも早く起きて川に行き、水面に塩をまいてそこの水を汲んで帰り、神棚や家内の神々に供える。カワシオクミという。二日の早朝に炊事用の水を主人が汲むことになつている。ワカミズクミという。

拝田地区では若水のお茶を飲んでから主人が氏神様にお参りする。参拝した後に部落からお供えした御神酒をカワラケで一杯いただいて帰る。山本地区では元日の早朝、主人と家族全員が打ち揃つて神詣でをする。まず服装を整えて家の神様にお参りした後、氏神様に参り（家によつては宇佐八幡にお参りを済ませてから）、雑煮を食べることになつていた。途中他家の人に会うと、年始の挨拶の次には必ず「もう宇佐へ参つたか」と声を掛けるのがならわしである。

拝田地区では、主人はお宮から帰るとまず家族の者を起こし、自分で雑煮を炊く。御飯類はいつさい炊かないが、これは主人の仕事である。その間じゆう女は手出しをしてはいけないといわれた。雑煮ができあがるとまず仏様にオゴツパン（御供飯）を上げる。ついで年の夜から床の間に供えてある御神酒を下げ、正月用にオナゴシ（女衆）が作つた煮〆や昆布・煮豆などを肴にして、家族全員が御神酒をいただき、また雑煮の朝食をとる。この際床の間や神棚のお札の前には、家族が食べるのと同じものを供えておく。また荒神様や大黒様などにも雑煮を供える。雑煮は家によつて作り方が違うが、醤油汁に餅を入れて作り、大根と蒲鉾を切つてのせた皿に盛つて食べるのが普通である。簡単にするときは汁の中に野菜や蒲鉾を切り込んで小餅を入れ、茶椀についで食べる。雑煮餅の大きさは家によつて違うが、雑煮は年の数だけ食べるものといわれ、特に子供にはそのように教えて年を取つたということを感じさせたものであるという。俚謡にも「元日や餅で押し出す去年糞」というのが残つている。

年始回礼はネンシ（年始）とかネンガ（年賀）といわれ、親類や日頃世話になつている家を回礼する。年始回りに行く時は主人とオナゴ（主婦）は別々に行くのが普通である。拝田では昔は女は正月三か日の間は外に出ないのがよい。女が外に出る

とその家は一年中マン（運）が悪いといわれた。しかし女も近所にはゴネンシに行くのが常であつた。年始に行く時は手みやげは持たない。まず最初に仏様にお参りして後に年始の挨拶をする。年始を受けた家では煮〆・煮豆・タチクリ（田作り）・昆布・数の子の料理を添えて酒を出し、また子供を連れておれば年玉として銭か品物をやつた。最近ではお宮でアイネンシが行なわれるようになつたので、ごく近親者かよほど親しい家でなければ年始廻りをしないようになつた。山本地区では、まだ部落のアイネンシは行なわれていないが、以前は道で逢つても三か日のうちは年始の挨拶をし、「モウウセーマイツタカヤー（もう宇佐八幡へお参りしたか）」と聞くのが常であつたが、最近はだんだん簡略化してきたという。

年始が済むと、元日はなにもしないで過すのがよいとされていた。特にこの日に銭を使うと一年中貧乏をするといい、お金を出して物を買うことは絶対にしなかつた。子供は凧上げ・こま・ラムネ玉・双六・いろはカルタなどで遊び、娘は羽根つきやカルタ（百人一首）を楽しんだ。大人は親しい者同志でヨローチ（寄合つて）、話をしたり宇佐八幡へ参つたりして元日を過した。夜はカルタ取りが盛んに行なわれ、老若男女が遅くまで興じたという。最近ではラジオやテレビの影響であまりしなくなつた。昔は正月の間じゆう、福引き・壁打ちころばし・こね鉢こかしなどといろ賭けごとの流行したこともあつた。

福引きをした。親になる者が三十センチくらいの細い紐を束にして、そのなかの一本に一文銭をとおしてあき、これを手のなかに握りこんでその手をさし出す。参加者はまず場銭を出した上で一本ずつその紐を引く。そして一文銭を引き当てたものが場銭を全部取る。あたらなければ親が取るが、引き当てれば取つた者がかわつて親になる。昔は公然と行なわれ、時には徹夜で勝負をしたこともあつたという。

子供のラムネ遊びと同じで、ラムネ玉のかわりに一文銭を使う壁打ちころばしをした。まず壁から五メートルぐらい離れて立ち、壁に向つて「一かけ」といつて一文銭を投げつける。参加者が順次投げてから、最も壁に近い所に落ちた一文銭の所有者からユク（行なう）順を決め、次に手持ちの一文銭を落ちている一文銭に打ち当てる。当たればそれを取り、次のをねらう。失敗すれば次の順番に当たつている者がかわつて打ち当てる。

こね鉢こかしは大きな鉢の縁から一文銭をころがして、その底にたまつている一文銭に重ねる遊びである。重なつたら取れるが、失敗すれば次の順番の者がころがす。底が狭いのであまり大きな勝負になることはない。正月には日なたに集まつて盛んに行なつたものだという。

元日の夜食べる飯をハツメシと呼び、米の飯を炊くのが普通であつた。夜は子供もワケーモンもそれぞれ親しい者同志で集まり、遅くまで遊ぶことを許されていた。これは正月の三日まで続けられた。

元日か二日のうちに敷田（宇佐郡四日市町）のシーヤンという人が毎年やつて来た。袴に狩衣をつけて烏帽子をかぶり、手には太鼓と獅子頭を持つている。まず玄関からオモテ（室内）に上つてきて神棚に参り、家の人に新年の挨拶をした後に座敷で舞う。「一々億々千秋万才」とはやしながら舞い、終つて最後に獅子で子供の頭をパクリと噛む真似をした。そうすると子供の頭にカサができないといわれている。子供は万才が来ると、その後について廻るので子供の頭に不足しなかつた。万才を舞う家は村内ではきまつており、だいたい古い家が多かつた。謝礼として米一升とオカサネを与えたので、シーヤンが帰る時はカマスに貰いものを入れて車に積んで帰つていた。夜は上拝田の安倍一統のオモヤ（本家）に泊つたので、その晩は近所の人を集めて、人形操りの段物狂言をみせるのが常であつた。人形は中津の北原から持参していたという。

春駒の来たこともある。これはどこから来ていたのか不明であるが、馬の首の形を作り、これを青竹に結びつけたものにまたがつて、「ハシドウドウ、ハイドウドウ」と面白く歌い廻つた。子供達が遊び道具として作つていたこともある。

その他正月に来る物貰いとしては、獅子舞い・猿回しなどがあつた。謝礼として餅や米を与えていたが、乞食にはあん入りの餅をやつたものである。

2、二日　男は朝のうちにナイゾメをした。馬具・鞍・鋤などに使う縄をなつたり、草鞋やアシナカなどを作つてオカマに供える。まず藁を打ち、馬の口縄・鞍に使う小縄・鋤につけるミズナワ・草鞋・アシナカ・草履などを一組ずつ作るならわしで、たとえ午前中かかつても作らねばならぬとされていた。

娘はヌイゾメをしなければならなかつたが、特にきまつたものを作ることはなかつた。なにを縫つてもよいが、午前中に一度は針を持つこととされて、母親がきびしく娘をしつけたものである。しかし特別な作法はなかつたという。家によつては女はヒキゾメをした。これは綿糸を引き、布を織る真似をすることである。たいていの家では子供が書初めをした。習字紙に墨で字を書かせるが、これは何を書いてもよい。学校で宿題を出してくれるので学年に応じた字を書く。かたい家では子供を正装させ、主人や全員が一緒に書初めをする。

部落内の数少ない商店では二日の朝景品をつけて売初めをした。山本の酒屋では最初の客に大きなオカガミをくれ、そのほかにもわらじなどの景品をつけるならわしがあつた。

3、三日　元日・二日に続いて仕事をせずにヨコウ（休む）が、家によつては親類・知人を招いてオセツをする。上拝田ではワケーモンがオニワ（鬼会）の準備をする。また部落内の各家を廻つて鬼会の寄付を集める。

4、四日　上拝田の観音寺でオニワ行事が行なわれ、上拝田・下拝田・山本地区の若者・大人・子供が参加する（後記）。この日上拝田ではオセツをする。前年に嫁をもらつたり嫁にやつたりした家では鏡開きをする。下拝田・山本地区では鷹栖観音の鬼会に参加するが、オセツはこの日とは限らず、三日から七日までの間に行なう。

フクガリとは福を刈ることだとか、福をカルウテ（背負つて）帰るからフクガリイだとかいつている。この日朝早く、オトコシ（主人か長男）が自分の山にいき、持参した御神酒と餅（または御神酒・昆布・米）を山の神に供えて木を切つてくる。どの木でもよいが、この木は持ち帰つて家の外にホタツテ（打捨てて）おく。十五日の朝粥を炊く時に必ず使う。昔は枯木や下枝はどこの山の木を切つてもよいとされていたが、現在は必ず自分の持山から切つてくる。また四日以後に、本格的に山仕事を始める時には御神酒と餅を山仕事の場に持つていつて供えた。

四日の夜は大黒様に供えた餅を使つて雑炊を作る。これを福入り雑炊という。

5、六日　六日と十六日は山の神のセツビ（節日）といい、誰も山へは行かない。山本では八日と十六日が山の神のセツビ

である。この日山へ行つて山の神のオセツの匂を臭ぐと病気をするとか、「餓鬼の苦もゆるむ」日だから山で仕事をしてはいけないなどという。またこの日に山仕事を一緒にしている組は仕事を休んでオヒカリ（直会）をする。

6、七日　ナヌカ正月といつて仕事をヨカイ（休み）、家じゆうで御馳走を作つて食べる。朝食には七草粥を食べる。山本では昔は宇佐の古井戸（宇佐町北宇佐の百体様の上の窪地）の芹を摘んできて入れたというが、現在はたいてい野菜を使つている。拝田では近くの川端から、七草（セリ・ナズナ・スズシロ・ホトケノザ・タビラコ・ゴギヨウ・ヨモギ）のうちの二・三種をとつてくる。北側に向つた窓の下で左手にレンギ右手に庖丁を持つて俎板をトントン叩きながら切つた。その時、「唐土の鳥が日本の国に渡らぬさきにナズナ七草はやしてホトト」と歌いながら、調子をとつて切ることになつていた。現在は自家製の野菜を使つた粥を炊く家が多い。七草粥を食べると一年中サカシイ（健康である）という。山本では七日は馬の正月といつて、馬を使わずに休ませ、餅を切つて食べさせた家もあるというが、一般には二十日正月を馬の正月という家が多い。下拝田では、この日に正月中に供えてあつた注連飾りと鏡餅をオロス（下げる）家が多い。上拝田・山本地区のカガミオロシは二十日である。

7、十日　この日は千日参りである。山本の鷹栖観音堂には朝の一時頃から遠近の善男善女が参詣して願をかけたという。特にこの日、頭がよくなるように願をかけると御利益があるというので、鷹栖の観音様を知恵観音とも呼んでいる。この日は観音寺のオツサン（和尚さん）が対岸の観音堂に籠り、参詣者一人一人のために大般若経を読唱し、最後に経本で頭を叩く。帰りには参詣者に直径三センチぐらいの小さな餅をくれる。これは知恵餅という。食べると頭がよくなる信じられている。昔は随分遠方から参詣人があつたが、最近は少なくなり、拝田・山本地区の人が主に参詣しているという。

8、節分　現在は新暦の二月四日を節分という。子供を中心に豆撒きをする。昔は旧暦で立春の前の晩を節分あるいは豆撒きといつた。この日の夕方、トベラを家の中でふすべて家の出入口にさしたり、表や裏の窓にはさんでおく。厄病を除けることができるという。拝田は真宗が多いのでする家としない家とがある。山本の禅宗の家では必ずすることになつている。上拝田

では観音寺のオッサンが子供を集めて豆撒きをしたが、大人は参加しなかつた。しかしかたい家では主人が羽織・袴をつけて年男になり、鬼門の方に向つて「鬼は外、福は内」と唱えて豆を撒き、それを拾つた者は年の数だけ豆を食べると厄が落ちるといわれた。家によつては本を撒き、「そこにもゴホン。ここにもゴホン。」と唱えて子供に拾わせた。現在では子供のある家が主にし、豆の代りに菓子を撒く家が多い。

三、小正月の行事

1、十四日　この日はヨシノミといつて、夕飯に小豆・粟・餅米・糯米の四種を入れた飯を炊いて食べた。この飯は夕方早目に食べなければいけないといわれていた。また奉公人をおいている家では、この日に再契約したり暇をやつたりしたといわれ、「ヨシノミ一杯、粥一杯。ながながお世話になりました。」といつて食べるならわしがあつたという。

上拝田では、この日子供達が藁の先を束ねたものを持つて各家を廻り、ツボ前の畑を叩きながら、「もぐら打ちゃー十四日アシナサ（明日の朝）お粥お粥」と唱えて、餅を貰つて歩いたという。

下拝田や山本では、この夜子供や若い衆が集まつてドンドを燃やし餅を焼いて食べた。ドンドヤキの火で焼いた餅を食べると一年中サカシイという。ドンドの燃え残りの薪で十五日朝の粥を炊くと火事にならぬといわれた。山本地区のドンドヤキは次の通りである。十四日が近付くと、一週間ぐらい前から子供達がドンドヤキの準備を始める。まず村山からゴシン棒にする大きな木を切り出してくる。またドイ（土居）内の各家から一戸当たり割木二～三本・藁一把ずつを集めてきてドンドのゴシン棒を作つておく。これは山から切り出した長さ三～四メートルの松の大木に藁を切つて、周囲にくびりつけたものである。

十四日になると、ワケーモンや子供がドイ内から各家の注連飾りや門松を集めてくる。ゴシン棒の上部に門松を縛り付け、近くの田の中に立てる。山本には山口・中村・下方の三ドイがあるので、それぞれのドイの近くの空いた田をえらんでたてる。

竹で三方から支え、さらに倒れないように上端に縄を結んで三方に引つ張り、周囲からオトコ竹や割木を立てかけて円錐形の枠を作り、一か所だけ入口をあけておく。外形は鷹栖観音のオニワの時に作るドンド松と似たものになるが、ドンドヤキのドンドは子供が内部に入れるように作つてある。これは十四日の夜に燃やすまでの間、子供がこの中に入つて遊ぶためでもあるが、よその組に焼かれるのを防ぐために、なかに入つて番をするためでもあるという。夜がふけると子供達は餅を貰つて廻り、また大人も餅を持つてドンドヤキの見物に来る。火をつけると周囲から藁や松飾りを投げ入れて焼く。子供達は火の燃えついた木や竹切を持つて田の畦の草を焼いて廻つた。虫焼きと野焼きの二つを兼ねて奨励された。子供達の集めた餅は針金などの尖端に串刺しにしたり、直接に放り込んで焼いて食べる。この餅を食べると一年中サカシイという。燃え残つたドンドの木を持ち帰り、翌朝これで朝粥を炊くと火事にあわぬという。ドンドの支柱に使つたゴシン棒は生木で大きいので、まわりが焦げる程度で燃え残る。子供達が切つて薪を作る。これを売つて銭にかえ、モウジンコウ（文珠講）の費用にする。

モウジン講は春秋の二回あるが、特別な日はきまつていない。子供だけの講で、昔は文珠菩薩が獅子に乗つた絵巻物を下げ、その前に団子や菓子を供えて祭つた。そして、「チエイーミリモウジン講、南無文珠シーリー菩薩、エンミョウ、ショウミョウ、大ショウミョウ、大悲大悲御願成就、福徳シツサイ、安穏ケール」という呪文を唱えたという。現在では子供会のような形になり、学校の先生を招いたりするので呪文も唱えなくなつた。

2、十五日　正月四日のフクガリで切つてきた木を焚いて餅粥を作る。粥は鳥の鳴かぬうちに食べないとその年はマンが悪いといわれ、粥を「吹イチ食ブル」と鼻の頭が赤くなるといわれた。この朝粥を近所の七軒から貰い集めて食べると夏ジケしないという話も残つているが、今では殆んど行なわれる例を聞かないという。この粥の中に観音寺のオツサンがオニワの時に祈禱して、正月中に持つてきて呉れたゴウバシに挿んだ米を入れて炊くとサカシイという。粥をまぜるにはゴウバシを使わねばならぬといわれている。ゴウバシで餅粥を果樹の股につけるとよく実がなり、年切れしないという。山本では十五日に果樹に鉈で切り目をつけると、その年はよくなるというが、最近はしなくなつた。朝粥を炊く時に前夜のドンドの燃え残りを焚

くと火事に遭わぬというが、山本や下拝田では正月四日のオニワの時に持ち帰つたオニノタイマツをこの日に焚くと火事にならぬという。十五日は仕事をしないことになつていたが、理由はわからない。この日は「十五日じゃから」といつて仕事を休み、友達と話をして遊び暮したという。夜は御馳走を作つて食べた。

3、十六日　この日は六日と同じように、山の神のセツビで「餓鬼の苦もゆるむ」といい、山仕事には絶対に行かなかつた。上拝田では冬山の仕事をする組が集まつてオヒカリ（直会）をしていた。

4、ハツヨリ（初寄り）　拝田・山本地区ともに、正月の十五日から二十日までの間に部落のハツヨリを開く。現在は公民館で行なうが、昔は氏神様かお寺で開いていた。朝から開くので昼には鮨の物相飯を食べるならわしがある。この時に新年度の行事計画をきめ区長を改選することになつている。部落の行事計画は祭りの日取りや田植の水のこと・道普請や寄付のこと・その他田植や稲刈などの傭人の日当の取り決めなども話し合う。

5、二十日　ハツカ正月とか馬の正月、あるいは女の正月ともいう。正月は二十日正月で打ち切りになるといわれ、正月中飾つてあつた鏡餅を下ろす。これを焼いて食べると歯がヨク（丈夫に）なるとか虫歯ができないなどといい、これをハツカノハガタメと称している。馬の正月というのは馬屋の入口に飾つておいたオカガミを下ろして割り、三回に分けてハミ（餌）に混ぜてやり、この日は牛馬を使わずに休ませておくからである。昔はお宮の近くの道路で競馬をしたという。駄馬に飼主が乗つて見物人の前を走るだけで、競走はしなかつたようである。上拝田では二十日に餅をついて神仏に供えるならわしがあつた。餅を食べると粘るのでシハス川に流れないといわれたためだという。女の正月というのはなぜそう呼んでいるのか理由は不明である。昔からそういわれて来たという。

6、二十三日　三夜様で、家によつてはフツ（蓬）餅をついていた。

7、二十九日　この日を送り正月といい、その年が厄年（男四十二才、女三十三才）にあたつている家では餅をつき、オカガミを作つて神棚や床の間に供えておく。近所の家にも「トンカサネのお餅をオアガツチョクレ（食べて下さい）」といつて、

鏡餅を配る。これを「トシカサネをする」という。トシカサネをする家ではその夜御馳走を作つて家族で食べた。

四、鷹栖観音のオニワの由来

山本の鷹栖観音堂で、正月四日（戦前までは旧正月、現在は新暦の一月四日）に行なわれる修正鬼会のことを、当地ではオニワと称している。オニワは正月会の最後に勤修されるが、当地のオニワは国東半島の修正鬼会に比べるときわめて素朴で、行事の次第も形態も国東のそれとは全く異なつている。山本の鷹栖観音堂を奥の院としている、大字上拝田の鷹栖山観音寺（現住職は曹洞宗であるが、観音寺は真言宗で檀徒はなく、本尊仏は十一面観音である）に伝わる同寺縁起によると、観音堂の開基は法蓮といい、法蓮にまつわる起源説が語り伝えられている。

文武天皇の大宝年間（七〇一～七〇四）に、彦山での修業を終えて宇佐に来た法蓮和尚が、上拝田の和尚山で修業していた時のことである。当時柳浦村（現長洲町）の江島に住んでいた今戸盛時というものが、豊後田野の間野長者が作りかけて果さなかつた、楠の木像にまつわる妖怪を退治して観音菩薩の霊験をえた。小松浦に観音を迎えて伊呂利の地に安置した。ある夜夢のお告げがあつたので、盛時が霊夢の通り観音像を駅館川に浮かべたところ、像は川をさかのぼつて現在の鷹栖の崖下でとまつた。観音様が有縁の地といつたのはここであろうと、早速その像を岩窟の間に安置した。ちようどそこに修業中の法蓮和尚が来合せた。その時、豊後の田野の方から飛んで来た雌雄の鷹が霊窟の上に巣をかけたので、観音像を安置した岩窟を鷹栖山と名付け、群魔降伏の霊境としたという。

法蓮は和尚山の坐禅石で修業中の身であつたが、里に下つて川を距てた東の田の中から、鷹栖観音堂を拝んでいた。後にこの場所に拝堂を建てた。これが今日の観音寺の創建という。毎月四日の月が鷹栖山に傾くころ、自ら松明を携えて観音堂下の浅瀬を渡り、観音堂に参籠するようになつた。その後、法蓮は山本に虚空蔵寺を建立し、神亀二（七二五）年聖武天皇の御代に宇佐八幡が小椋山に鎮座した時、全時に創立された神宮寺弥勒寺の別当に任ぜられて、上拝田の和尚山を去つた。

土地の人はこの法蓮の故事にちなんでオニワが始められたと伝えている。

行事に使用する鬼の面は楠製で寺宝とされ、製作年代は五百年ぐらい前と伝え、ところどころ虫が食つている。鼻の穴の一方が大きいのは、川渡りの際に縄を通して背負うために拡げたものである。

五、オニワの準備

オニワの行なわれる観音寺は真言宗の祈禱寺で檀徒は持つていない。現在は三大字の共有で、上拝田四人・下拝田三人・山本三人計十名の寺総代が出ているが、オニワの行事に際しては特に仕事を分担するようなことはない。オニワに参加するのは上拝田・下拝田・山本三部落の青年と大人および子供の有志、それに部落外の信者である。行事の準備は前日または当日の昼過ぎまでに、主として上拝田のワケーモンによつて行なわれてきた。現在は青年団の支部長が中心になつて準備をするが、年々団員が減つて行くので、上拝田の団員だけでは準備ができかねる状態にあるという。

まず観音寺に集まつてオツサンに挨拶をし、本堂で観音様をオゴウ（拝ん）だ後仕事の打ち合わせをして分担をきめる。これはオニワの行事が行なわれる場所が観音寺と対岸にある観音堂の正門脇とに亘つているからである。二班に分かれて約半数の者が川船を利用して対岸に渡る。仕事は観音堂下の仁王像脇にある五〜六平方メートルばかりの空地にドンド松を立てることである。中央に枯木を寄せ集めて柱を作り、周囲から生のオトコ竹を束ねたものを立てかけて倒れないようにする。外観は高さ四〜五メートルくらいの円錘状の竹笹の束である。ドンド松は行事の時に燃やすので特別に飾りつけることはない。材料の青竹・枯木・生柴などはその日に周囲の山から伐つたものを使用する。またオニワの行事中にドンドが燃えつきないように、補充するための竹束も用意しておく。仕事中に住職が観音堂にお参りするが特別な準備はしない。

寺に残つた組は山から枯れた竹を取つてきて松明をこしらえる。枯れたオトコ竹を二メートルくらいに切つたものを三〜四本ずつ束ねたもので、中ほどのところを藁縄で三〜四か所くびる。竹は部落内の古い竹垣を買つてくることもある。準備する

松明の数は一定しないが、だいたい行事に参加する人数を見込んで作つておく。最近は三十八人前後の参加者があるが、多い年は五十人ぐらいの参加があつたという。オニノタイマツは生の松の割木で、長さ七十センチくらいである。枯竹の松明と仝数を用意し、二つに分けて藁縄で束ねておく。縄の本数はその年の月の数である。閏年は旧暦で十三か月であるから、オニノタイマツは二束とも十三か所を結んでおく。オニワの行事がある間は観音寺の庭先にも大きなドンドヤキを燃やし続けるので、そのための燃料も準備しておく。以上の諸準備に要する費用は、以前は寄付をキツテ（貰つて）廻つたが、現在では区費から出すことにしている。

寺方では前日までに、オニワに使用する鬼の面を仏前に飾つておく。面は楠製で男女の二面があり、男の面は長径四十二センチ、短径二十六センチで、どちらも眼と鼻の穴をあけてある。正月十四日までに、部落内の各戸に配付するゴウバシを準備する。オトコ竹の青竹で作つた割箸の先に、数十粒の米を包んだ紙包を挟んだもので、オニワの日に寺の縁先に飾つておき、行事の際に祈禱をしておくためである。これは当日は配付しない。ゴウバシの由来は不明であるが、住職の配付したゴウバシの米を正月十五日の粥に混ぜて食べると一年中サカシイという。

オニワに参加する人は、各自で当日までに草鞋一足・六尺褌・手拭い一本を用意しておく。最近はパンツの上に褌をしたり越中褌のまま参加したり、腹巻を着用する者もあつて、裸ではあるが統一を欠いている。

六、オニワ行事の次第

当日は拝田ではオセツをするのがならわしであつた（一月四日の項参照）。行事はオセツが終つてから夜の九時頃から始まる。観音寺では夕食を終つた後、七時頃から住職と近所の世話役が数人で万端の準備を整えて待機する。

八時頃になると、オニワの行事に参加する人々や見物人が集まり始めるので、頃合を見はからつて、世話人が庭先に用意した松明に火をつけてドンドヤキを始める。同時に本堂では住職と信者の有志が本尊の十一面観音に向つて、大般若経の読経を

開始する。僧侶は観音寺の住職だけで他からの応援はない。この読経は行事が終るまで続けられる。鬼が出発すると、住職は川向うの観音堂に相対して読経を続ける。

行事に参加するワケーモンは川渡りをすると、「その年は風邪を引かぬ」とか「一年中サカシイ」という。また観音様は知恵観音でもあるので「頭がよくなる」と伝えられ、昔から大人も子供も参加してきた。特に上拝田の男子は十五才になればたいてい参加していたという。現在でも中学生と高校生が参加している。正月中の行事なので帰省した大学生や青年も参加してる。大人で行事に参加するのは比較的少数であるが、なかには毎年続けて参加してきたという四十年配の人もいた。寺に参集した人々は本堂の別室で裸になり、六尺褌を締め、ねじり鉢巻をしてから本尊に礼拝し、庭に下りて草鞋を履く。燃えさかるドンドで暖をとりながら、参加者の集合を待ち合せる。九時頃オセツを済ませた部落民や近郷の見物人が集まつてくると、いよいよ川渡りの行事が始められる。

まず用意してある二メートルあまりの松明がドンド火の中で点火され、参加者が次々にその松明を手にとつて、一目散に寺の庭から駈け出して行く。観音堂下の川の浅瀬を松明をかざしながら渡る。浅瀬とはいつても川巾は四十メートルぐらい、深さは一メートル以上はあるので、胸まで水にひたつて渡らねばならない。真先に渡るのは男・女それぞれの面を藁縄で背負つた二人の若者である。続いて二つに束ねたオニノタイマツを背負つた者が渡る。対岸の堂下に着くと、先頭の者が手にした松明の火で用意してあるドンド松に火をつける。青竹を束ねてたてかけたドンド松に石油をかけて下から点火するので、火柱が立ち爆竹の音がして壮観である。

川を渡つた者はすぐに百八段の石段を駈上り、観音堂を拝んでから、すぐに石段を駈下りて仁王門脇のドンドの火の周囲を三回廻る。持参した男女の面をかわるがわる頭上に高く掲げながら廻るが、面を頭上にかぶれば「頭がよくなる」とか「頭の病気をしない」という。昭和初年頃までは、火の周囲を廻る時に呪文をしたというが、今は伝わつていない。

先に渡つた者はドンド松の周囲で暖をとりながら後続の者を待ち、だいたい集まつたところで、世話役が寺から持参したオニノタイマツを燃えさかるドンドの中に投げこむ。オニノタイマツは松の生木を割つたものであるからすぐには燃えつかず、表面がくすぶつて半焦げになつたところで火の外にかき出される。二つに束ねてあつたオニノタイマツは縄が焼き切れてばらばらになつている。これを各人が一本ずつ手に携える。別に指導者がいるわけではないが、参加者の中の主だつた者が「別れようや」と声をかけると、門の下の旧県道（現在は道巾二メートルぐらいの山道）に半数ぐらいずつ二班に分かれて集まり、すぐに松明とオニノタイマツを持つたまま駈走して行く。一方は上手の薬師様へ、他の一隊は下手の薬師様へお参りに行く。昔は男面を持つた者は上手へ、女面を持つた者は下手に加わるならわしであつたという。

下手の薬師様は絶壁の中腹に岩窟を掘つて安置されているが、距離は観音堂から三百メートルぐらいの所にある。駈けて来た一隊は形式的に拝んだ後にすぐ引き返す。上手に向かつた一隊は以前は上の薬師様まで行つたらしいが、最近は距離が遠いので、下手に向かつた一隊と観音堂の真下の道で出逢うように、途中から引き返してくる。

観音堂の門前の道路で双方が遭遇すると、三十メートルぐらいの距離をおいて対峙する。双方から一人ずつ順次に、「さあ来い」と呼びながら駈寄つて行く。左手に持つた竹の松明を相手の頭上にかざし、右手に持つたオニノタイマツで自分の松明を叩く。火の粉がパツと相手の頭上にふりそそぐ。相手も全様な所作をするので負けて逃げるわけにはいかない。踏み止まつて叩き、火花を散らし合う。時には右手のオニノタイマツで相手の松明を叩く。ついには火の燃えている松明と松明で叩き合う。こうなるともう乱打・乱撃の繰返しで、敵味方入り乱れて壮絶な叩き合いをする。これをタタコウ（戦う）という。

戦つて松明の火が消えた者はドンドの火をつけてまた戦う。その間に新手が代つて戦う。タタコウというのは、もともと自分の持つている松明とオニノタイマツを打ち合せて、火花を散らし悪魔を追払うことをさしているので、この行事には勝敗はない。

行事に参加する者は頭から火の粉をかぶつても決して火傷をしないといわれ、時には乱斗のさい誤つて路傍の藪の中に転り

落ちることもあつたが、怪我をした者はないという。山道で火の粉を散らし、ドンドの大火をたくが一度も火事のおこつた例はない。昭和七～八年頃まで観音堂の下に餅屋が一軒あつたが、藁葺き屋根であつたけれども、火の粉による火災に罹らなかつたのも観音様の御利益であつたと信じられている。火花を散らして激斗すること数回、枯竹の松明が短くなる頃、ドンドの火も燃え落ちてしまう。頃合をみて対岸の観音寺ではオッサンが鐘をつきならす。それを合図に全員が集まり、最後の大火を燃して暖をとり、各自松明を持つて川を渡つて引き揚げる。

行事が進行する間、観音寺の庭では始終ドンドの火を燃し続け、本堂ではオッサンを中心に信者が大般若経の転読を続ける。引き揚げてきた人々は、一段と燃えさかる庭先の焚火で暖をとる間に、世話役から酒を一杯ずつよばれ、草鞋をほどいて着替える。参加者は行事の間、寒中を褌一つで行動し、往復共に胸まで没する川を歩いて渡るが、そのために風邪をひく者は一人もいないという。参加者は各自が携えて帰つたオニノタイマツを持ち帰り、自宅のカマドの奥に立てかけておく。火災防除のお守りとして一年間保存しておく。昔から拝田部落に火事が少ないのはオニノタイマツのおかげだという。

寺での行事が一段落すると、準備に参加した上拝田の青年団員は公民館に集まつてウチアゲをする。準備は女子青年団員がしていたが、今年は団員が数名に減つたので取り止めた。昔は青年会の世話役の家でウチアゲをするのが常であつた。この時は酒と御馳走をよばれただけで、別に行事はなかつた。

付記　本稿は昭和三十九年度に文化財保護委員会より、正月行事の記録作製を依頼されて調査したもので、調査にあたつては山本区長広崎富士夫氏・観音寺住職梅津禅海師はじめ田口権之助氏（84才）等地区の多数の方々に御協力をいただいた。厚く御礼を申上げたい。